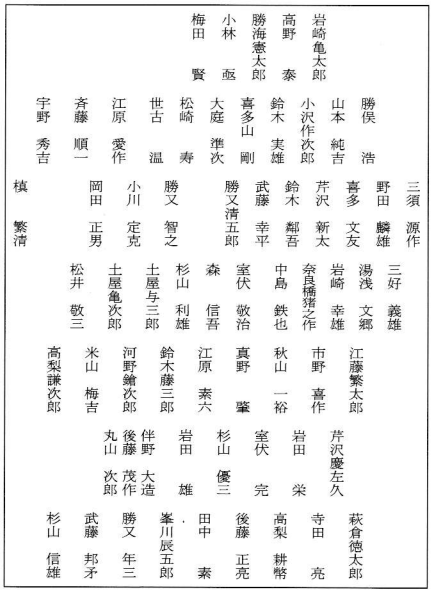
沼津市
明治史料館通信

2002. 1. 25（季刊 年4回発行）Vol.17 No.4　通巻第68号

江原素六を囲む人びと（森元一氏所蔵）



駿東郡長（在職期間明治32～38年）河野鎗次郎がいる点やその他の顔ぶれから推測すると在京の駿東郷友会の会員たちではないだろうか。江原の他の顔写真との年齢比較や高梨鎌次郎が明治44年（1911）に死去している点、その他生年がわかっている以下の人物の年恰好から判断して、撮影時期は明治40年前後ではないかと推定される。台紙に「東京池之端仲町宮内幸太郎」と写真館の名が入っているので、東京で撮影したことは明らかである。

生年判明者：丸山次郎（明治15年、江原の次男）、江原愛作（21年、四男）、芹沢慶左久（18年、金岡村西沢田）、森信吾（13年、浮島村石川）、岩崎幸雄（20年、清水村八幡）、室伏完（19年、小山町生土）、宇野秀吉（18年、沼津町）、米山梅吉（元年、長泉村中土狩）、江藤繁太郎（文久3年、金岡村岡宮）、鈴木藤三郎（安政2年、周智郡出身実業家、富岡村で農場経営）。

江原素六とその周辺 〈37〉

江原素六と駿東郷友会

明治三十九年（一九〇六）、駿東郷友会という団体が発足し、江原素六はその会長に推戴された（『静岡民友新聞』明治39・5・3）。静岡県駿東郡の出身者・在住者による同郷・親睦団体であり、会員は主に在京者から構成されたと思われる。

明治十年代以降、東京で勉学したり就職したりする地方出身者が増えると、故郷を同じくする人々は親睦を目的に結集し、多数の団体が結成されていった。同郷団体には、県単位や郡単位で組織されたものがあったが、静岡県の場合は、全県を範囲とした岳南郷友会（明治十九年創立）があったほか、駿河・遠江・伊豆の旧三国をそれぞれ範囲とした、駿河郷友会（明治三十二年設立）、駿州学友会（大正九年設立）、遠州学友会、伊豆郷友会（明治二十五年設立）などが分立、消長を繰り返した。

郡を単位とする同郷団体は、県や旧国を単位とする団体よりも遅れて組織されたと考えられる。

駿東郷友会については、ほとんど史料がないため具体的にどのような活動をしたのか、どんなメンバーから構成されたのかはよくわからない。他の同郷団体同様、東京や地元において交流・親睦のための様々な催し物を開催したり、会誌を発行したりといったことではなかっただろうか。

わずかに知られる新聞報道からは、明治四十年（一九〇七）八月四日、沼津の千茂登座において演説会を開き、副会長井口省吾（陸軍少将）が「郷友会の発展に付聴衆に望む」、角田真平（衆議院議員）が「余の平生」、荻生録造（医学博士）が「トラホームに付て」、真野文二（工学博士）が「業務の撰択」、手島精一（東京工業学校長）が「米国視察談」、松本君平（衆議院議員）が「殖民帝国」といった講演を行ったことがわかる（『静岡新報』明治40・8・7）。演説会の後は、臨川館を会場に懇親会が開かれ、百余名が参加したという。講師は、松本を除けば、いずれも沼津兵学校出身、沼津藩士出身、沼津・駿東郡出身の名士たちである。同じ日の講演会を予告した記事には、他に服部綾雄・荒川重秀・湯山寿介・山岡音高らの名前が出席予定者として掲載されている（同明治40・8・3）。やはり、山岡以外は沼津・駿東郡ゆかりの各分野での活躍者たちである。

大正元年（一九一二）には、会長江原・副会長井口の名で、「駿東郡在住者の子弟にして在京学生の保護監督致し度候間父兄諸君は宿所姓名及在学の校名等左記本部へ至急御報相成り度候」という新聞広告を出している（『駿豆新聞』大正元・12・5）。本部は高田馬場の長谷川方とある。

駿東郡を代表する在京の名士であった江原が、大正十一年（一九二二）に亡くなるまで会長の任にあったことは、葬儀に寄せられた同会の弔辞から判明する。

〈参考〉樋口雄彦「旧幕臣・静岡県出身者の同郷・親睦団体」『沼津市博物館紀要』24

（樋口雄彦）

ぬまづ近代史点描 ㊾

絵葉書にみる静浦・内浦の漁業

名所を紹介した「名所絵葉書」の中には、静浦・内浦の漁業の風景も取り上げられている。いずれも大正期から昭和初期にかけて撮影されたものと思われ、当時の漁業をうかがうことができる。

魚見の櫓（うおみのやぐら）

3ページ上段の絵葉書は内浦の長浜であり、魚見の櫓、和船や発動機船、網小屋などがみられる。左側の山は戦国時代の長浜城跡で、背景に淡島と富士山を望む風光明媚な景色である。

長浜は、かつてマグロやカツオなどの魚群が、淡島の西側を廻る潮流に乗ってやって来た優れた漁場で、湾入する地形を利用し、魚群を網で断ち切り、浜に追い込んで捕る建切網（たたきりあみ）漁業が盛んだった。

魚見の櫓は、当時島だった沖ノ

島に立ち、櫓の上から、漁場に入った魚群を追い込む指示を出していた。長浜の漁場全体の指揮を統括した山の上のオオミネ（大峯）に対し、コミネ（小峯）と呼ばれた。

中段の絵葉書は静浦の多比であり、魚見の櫓、多くの和船、網小屋がみられる。この魚見の櫓も、長浜のコミネと同様の役割を果たし、コヨミド（小魚見所）と呼ばれた。

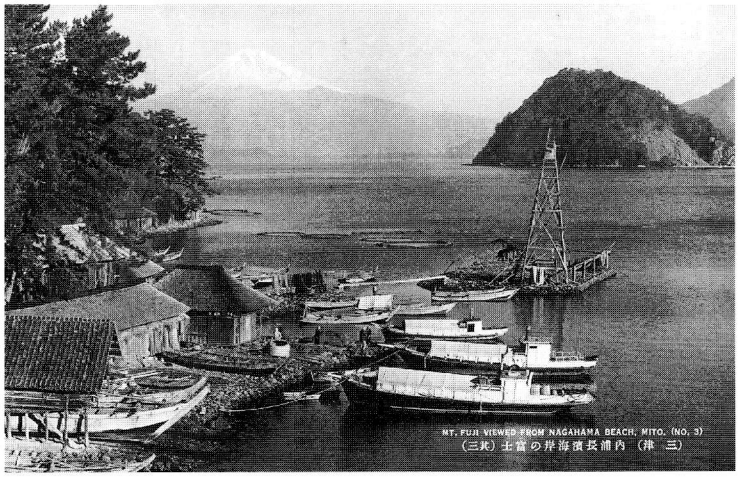
また、浜に数多くみられる大型の竹籠は、カツオ釣漁の生餌（いきえ）となるイワシを、生きのいい状態で運ぶための生簀で、イキョウと呼ばれた。カツオ釣漁は駿河湾や伊豆沖で盛んに行われ、イキョウも大正期に大量に作られたが、後にイワシを傷つけにくい網製の生簀に取って代わられた。

下段の絵葉書は、魚見の櫓が船上に付いた魚見船である。大正期に魚を逃さない構造の大謀網（だいぼうあみ）が導入されると、海岸から離れた漁場でも魚群を追い込んで捕るようになり、移動が可能な魚見船が用いられた。

イワシの生簀

4ページ上段の絵葉書は静浦の口野であり、現在の狩野川放水路の出口にあたる。かつては湾入する地形を利用し、湾の奥に網を張った生簀を造り、カツオ釣漁の生餌となるイワシを養っていた。

また、右側の山の先端には、魚群を見張る魚見のマツの大木がみられ、オオボラヨミド（大洞魚見所）と呼ばれていた。このような魚見のマツは、静浦・内浦の各漁場にあったが、現在ではほとんど



「（三津）内浦長濱海岸の富士（其三）」（当館蔵）

「（沼津名勝）静浦多比濱ノ景」（当館蔵）

「沼津海岸魚漁見張り根遊舟」（当館蔵）

残っていない。口野では、内浦の建切網漁業と類似した方法で、マグロやカツオを捕る大網漁業が盛んだった。

下段の絵葉書は静浦の江浦沿岸であり、イワシを運ぶイキョウが船に長く連なっている風景がみられる。江浦は、江浦湾の中で潮流が最後に廻って来る不利な漁場だったが、波は静かで、イワシを養うには適していた。

カツオ釣船へのイワシの調達は、エサカイという商売として成立していた。買ったイワシに餌を与えず一～二週間生簀で飼い、生き残った強いイワシを、カツオ釣船に売った。エサカイは、イキョウを連ねて、イワシを買いに行き、またカツオ釣船に売りに行っていた。

〈参考文献〉沼津市歴史民俗資料館編『沼津内浦の民俗』（一九七六年）、同編『沼津静浦の民俗』（一九七七年）

「（静浦風光）口野ノ生巣」（当館蔵）

「（沼津名勝）江ノ浦池巣」（当館蔵）

お知らせ欄

◎歴史講演会の開催

明治期後半に駿河地方で活躍した文学者である槇不言舎をテーマにした講演会を開催します。

講　師：関口昌男氏（日本大学講師・沼津史談会副会長、『槇不言舎の研究』著者）
演　題：「槇不言舎の文学」
日　時：2月3日(日)
　　午後2時～4時
会　場：当館講座室
定　員：一〇〇名、参加費無料
申込み：当館まで電話で

史料館は
タイムカプセル
史料を
未来に伝えます

沼津市明治史料館通信　第68号
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂三七二一一
電話　〇五五-九二二-三三三五
FAX　〇五五-九二五-三〇一八
http://www.city.numazu.shizuoka.jp/sisetu/meiji/index.htm